

御伝鈔（その2）

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、親鸞没後33年に親鸞聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。続いてその翌年、親鸞聖人の伝記絵『親鸞伝絵』を著わされ、詞書（ことばがき）の部分だけを『御伝鈔』（上巻・八段、下巻・七段）といいます。

第二段「吉水入室（よしみずにゅうしつ）」

建仁元年（1201年）、親鸞聖人が29歳の春の頃です。

親鸞聖人は、比叡山で僧位のあがっていく栄達の道を捨てて、本来の仏道修行の目的である「迷いをこえて悟りを開き仏になる道」を求め、一生懸命に仏道修行を励まれました。

しかし、自らの力で、悟りを開き仏に成ることは大変難しく困難なことを痛感した親鸞聖人は、思い切って「阿弥陀さまの本願念仏の教え」を説かれていた吉水の法然上人（浄土宗）のもとを訪ねられました。

法然上人の教えを聞いた親鸞聖人は、すぐに「阿弥陀さまの本願念仏」の教えを深く理解され、迷いの凡夫がこの身のままで、お浄土に往生し、仏になる真実の信心をいただいていたかれました。



大遠忌法要参拝写真（平成23年11月9日）



勝如上人ご巡教（昭和32年）

祖母が、よく話してくれたことがあります。昭和三十二年に、当時の本願寺ご門主が、善教寺へご巡教に参られたこと。お帰りの際、ご門主にお土産として渡したのは、まだ幼かった新門さん（ご門主の息子さん）への、五円玉を入れた財布。新門さんから頂いた手書きのお礼状も、嬉しそうに見せてくれました。

お礼状を下さった新門さんも、昨年、ご門主を退かれました。時代の流れを感じます。

住職レター

ここ最近、平成十二年に亡くなった祖母のことを、よく思い出します。だからでしょうか、法事での法話は、祖母とのエピソードをよく話しているような気がします。

祖母は、野球が特別好きだった訳ではないと思いますが、カープは大好きでした。特に、衣笠選手のファンで、カープが勝って衣笠選手が活躍すると、嬉しそうにしていました。今年のカープの状況をみると、優勝しそうな勢いなので、祖母が生きていたら、さぞかし楽しみな一年になったことでしょうね。